

# 学校人脈

## 相原高女・相原高

題字は上田三四三氏  
(文芸評論家)  
相原 40回生

④

二月初旬(六)の夜、その日は朝から春の訪れを待てるような陽気がした。

暖かい日差しを浴びる大阪・中之島の江橋ビル。ある一室だけが、異様な静寂に包まれていた。壮年の男ばかり、四十人弱。いずれも、口を真一文字に結ひ、不安と希望の入りまじった表情で並んでいる。その中から、唐福の広、がっしりとした体格の男が立ち上がった。新会社の常務永井幸太郎(4回、明38卒)。「神戸市東灘区住吉山手止である。壇上へ登り、ゆつくりとした動作で高松のボウツトから紙類を取り出す。努めて論議を促した。もともとが、説き上げる事は次第に高くなっていた。」「一、社名は日商株式会社とす。」

神井を本題に、世界の貿易商社として知られた「鈴木商店」の後継者神井、あの日商(現在の日商岩井)の誕生である。鈴木が創業して、わずか十ヶ月後の昭和三年二月、神井以来の生え抜き社員三十九人という小所帯で、再び貿易業界に名乗りを上げたわけだ。

世界恐慌の余波をかぶり、台湾銀行の取引停止で倒産に追い込まれた、あの日。負債整理に駆けずり回り、資金繰りに頭も下げた。そして、ようやくまとった新設立。機軸を定め上げる永井の脳裏に、この日までのさまざまな場面が浮かんで消えた。

恒を同じくした二人。才気かん詰りの高松に対し、地味ながら物事を静かに処理するタイプの永井は、自然と気が合った。そんな二人だが、卒業後、いったんは別々の進路を辿る。しかし、一年後、外資系の石油会社にいた永井を鈴木商店の高松が口説く。二人で

## 商社の長老

商社マンとしてのキャリアを誇り、世間をまたに駆け回ってきた永井が、幼いころは、おとなしいばかりの少年だった。高松で相原中卒業後、神戸商高(神戸大)に入学するのも長兄の勧めに従った。

当時の鈴木商店は、大番頭金子直吉のワンマン体制が敷かれていた。海外駐在を経て本店に帰った永井の仕事が、その金子の目に止まる。一躍、補佐役に抜き

だが、神戸商高には永井の一生を決する別が待っていた。後年、日商の同僚として働く同級生の高畑誠二である。たまたま、手

世界を相手に商売をする。高松は永井のたくいまれな業務能力を賞して強引に引き抜いたのだ。こうして、永井は商社マンとしての第一歩を踏み出す。明治四十三年(一九一〇)の暮のことだ。

<346>

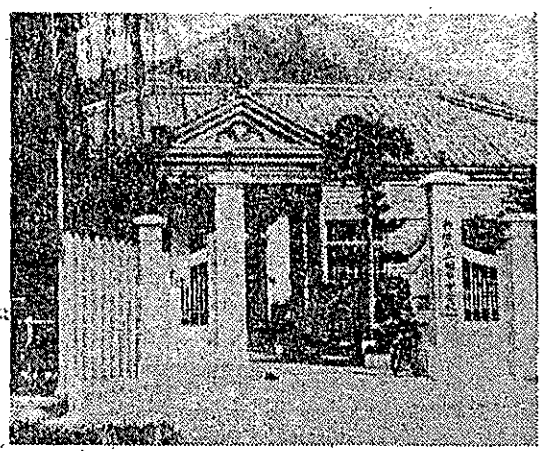
永井 幸太郎

# 「鈴木」の流れ継承



て成長していった。本店の永井、ロンドンの高松の働きで、鈴木は、世界の商社へのの上り、大正半ばには、取扱世界一の歴を確保。関連六十数社と合わせ「鈴木王国」の姿で呼ばれるまでになった。

銀行や取引先に頭を下げて回りながら、二人はひそかに準備した。鈴木は命流を絶やさない。鮮やかな手腕で後片付けをすすめ、新社設立に向け、行動を起こした。援助の手を差し伸べる人も相次ぎ、念願の新社設立にこぎつけた。



開校当時の面影を残す相原中学正門と本館(大正末ごろ)

方式の融資を左右する石炭、石油輸入のデコ入れを目指し貿易部長官として永井に自羽の矢を立てた。二十二年三月、永井は日商社を合併し、日本経済の立て直しという重責を担う。柔和な人柄で序内をまとめ、一年の任期を務め終えた。

機軸の立て直しを復興の軌道へと乗せた永井は、再び日商社長に選り、堅実経営で不況に強い体質を作った。さらに業績を伸ばしたが、健康を理由に二十九年、第一線を退いた。日商はその後、高松成長の波に乗り「大商社」の一つに数えられるようになった。永井は、ひと息ついたが、それもつかの間。烈な競争の中で、あの航空機騒音が降ってわいてきた。いま、始まったばかりの厳しい裁判。九十歳を超えた「生みの親」永井は、どんな思いで公判の行方を見詰めているのだろうか。

(敬称略)

の金子商法は、大戦後の不況をかまし損ねた。資金繰りに無理が生じ始め、取締役本店総支配人の永井が、幾度も改革案を提案するの

だが、ケムたがられて、子会社へ左遷されてしまった。その二年後、鈴木は、金融恐慌の波に揺られ、もつとも崩れ去った。残務整理が、永井、高松にかか

高松が信用にもなり、最初の決算から利益をばき出した。戦時中の二十年、永井は専務から社長へと昇進した。終戦後、永井の経営能力、貿易知識に目撃した高松が、ワンマン高松である。鉄、石炭重視の傾斜生産方式を導入し、経営復興に全力投入していた高松は、この

高松(31回)らが活躍している。